

短 報

メダラの学名 (常谷幸雄)

Yukio JOTANI : The Name of Less Prickly Form of *Aralia elata* (Miq.) Seem.

本誌62巻で山崎敬博士はメダラをタラノキの品種とし、その学名を *Aralia elata* f. *canescens* (Fr. et Sav.) Yamazaki とした。しかし、この学名は Siebold と Zuccarini が原著者であり、Franchet と Savatier による命名と見なせず、しかもそのタイプはタラノキであり、この学名をメダラに用いることはできないと考える。

Franchet と Savatier は、*A. spinosa* L. β . *canescens* の発表に際し、*Aralia canescens* Sieb. et Zucc. Fam. nat. n. 419 として、Siebold と Zuccarini の学名を異名に引用している。従って、Franchet と Savatier が発表した学名は、記載を伴うものの、明かに新組合せである。

Aralia canescens Sieb. et Zucc. は、記載の一部に、foliolis subtus canescenti-glaucis ad venas pilosis とあるなど、原 寛博士が結論したように、その正体はタラノキそのものと考えられる。

他方、Franchet と Savatier が記載した植物はメダラにあたる。大井博士は、この Franchet と Savatier の変種名を出発点に、*Aralia elata* var. *subinermis* Ohwi の新名を発表した。Siebold らや Franchet らが用いた標本の検討が残るが、暫定的にはメダラには大井博士の名を用いるのが適切である。

Franchet と Savatier はメダラの記載で *Nippon media*, ad Yokoska とシーボルトによる産地不明の標本を引用している。なお、Franchet と Savatier が、*Aralia spinosa* a. *glabrescens* の発表に引用した3点の標本中の1点も横須賀産 (Savatier 採集) である。この学名に該当するのはタラノキであり、横須賀にはタラノキもメダラも産すると彼らはみていたことになる。

実際、横須賀には Franchet と Savatier によるメダラ の原記載に一致する個体があり、1959年には本田正次博士とともに採集した。

Aralia elata (Miq.) Seem. f. *subinermis* (Ohwi) Jotani, stat. nov.

Aralia elata (Miq.) Seem. var. *subinermis* Ohwi [Fl. Jap. 829 (Mar. 1953), nom. nud.] in Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, No. 33, 80 (July 1953).

A. spinosa L. β . *canescens* Fr. et Sav., Enum. Pl. Jap. 1 : 192 (1875), excl. basionym.

A. elata (Miq.) Seem. f. *canescens* (Fr. et Sav.) Yamazaki in J. Jpn. Bot. 62 : 190 (1987), cum basionym. perperramut "*A. elata*" β . *canescens* Fr. et Sav.

(東京農業大学)

宮城県内のマツバラ (竹原明秀^a, 伊藤 聰^b)

Akihide TAKEHARA^a and Satoshi ITO^b : Distribution of *Psilotum nudum* in Miyagi Prefecture

我国におけるマツバラ (*Psilotum nudum* (L.) Griseb.) は関東南部以西の本州・四国・九州の暖帯林にまれに生育している。宮城県では佐々木・上野 (植研, 48巻204頁, 1973) によって石巻市桂島が随一の生育地であり、本種の北限地であると報告されている。当地において、発見

当時 (1972年)、確認された個体はわずか1個体のみで、その個体は採集され、標本として国立科学博物館 (TNS) に納められている。その後、数回の現地調査にもかかわらず、本種の生育は確認されておらず、消滅したものではないかと考えられてきた。

しかし著者等は、1991年11月24日、南三陸海岸島嶼の植生調査の際、牡鹿町山王島においてマツバランが自生していることを確認した。山王島は牡鹿半島東岸中央部の泊集落から東方約250mの海上にあり、東と西に並ぶ二つの小さな島で構成されている。泊集落に近い西側の島には山王神社が祀られ、比較的自然が保たれている。この神社の南東側の平坦地から緩やかな傾斜地は胸高直径80cmを越すタブノキの大木で構成するタブノキ林によって覆われ、林床は暗く、タブノキの落葉・落枝が多量に堆積している。マツバランはこの林の林床に数十個体が散生していた。ここでの本種は地上生で、草丈が6~13cmの小型な個体がほとんどで、15cmを越すような個体はみられなかった。

山王島の自生地は、桂島のそれとほぼ同緯度にあるが牡鹿半島をはさんで東側の親潮の影響を受ける地域に位置すること、桂島では消滅したことから宮城県では現時点で随一であること、生育個体が比較的多いことなどの特徴を有している。

なお、マツバランが生育しているタブノキ林の

種組成は以下のようであった。

海拔：40m，斜面方位・傾斜角：S15°W・5°，地形：緩やかな尾根，調査面積：15×15m。

（高木層）高さ12~5m，植被率90%，胸高直径40~116cm：タブノキ 5・5。

（亜高木層）高さ5~1.5m，植被率30%：ヤブツバキ3・3，ヒサカキ +。

（低木層）高さ1.5~0.3m，植被率10%：ヤダケ 1・1。

（草本層）高さ<0.3m，植被率30%：タブノキ 1・2，サルトリイバラ 1・2，ヤブツバキ 1・1，マツバラン 1・1，キッコウハグマ +・2，マサキ +・2，トベラ +，キヅタ +，イボタノキ +，ジャノヒゲ +，センニンソウ +，モミ +，ミツバアケビ+，ガマズミ +。

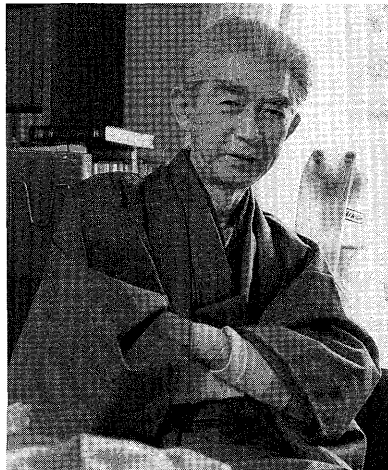
また、採集した標本は東北大学理学部生物学教室の標本庫（TUS）に収蔵する。

（^a岩手大学人文社会科学部生物学教室，^b山形県庁）

追悼

服部新佐さんをいたむ

Dr. Sinske HATTORI 1915-1992



The late Dr. Sinske HATTORI (1915-1992)
 (朝日新聞社撮影 1990. 6. 26)